とっておきの品

6月19日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

6月19日のおはなし「とっておきの品」

　店内のものをじっくり検分しながらゆっくり歩いていると若い男の店員が近づいて来た。私は店員にあれこれ話しかけられると気が散ってしまって落ち着いて見ることができなくなる。だから本当は放っておいて欲しいのだが、まあ、そういう店に入ってしまったのだ。我慢するしかあるまい。
「どうぞ」妙に軽い調子で店員が言う。「お手に取ってご覧ください」

　お手に取って？　私はちょっと意外に思って聞き返す。
「手に取っていいの？」
「どうぞ」
　なんだか変に軽い調子で店員が言う。「どうぞ」の「う」が一番高い音になるような、なんというか軽いと言うしかない調子で。店内でなければナンパされているんじゃないかと警戒したくなる。

　けれど手に取れるのは素直に嬉しかった。素手でべたべた触るような物ではないと思い込んでいたので、見て分かる範囲で判断するしかないと思っていたのだ。とはいえやはり、持ったときの重量感、手にしっくり来るかどうか、そして何より使い心地はどんなにじっくり見ても決して分からない。手に取って試せるならそれに越したことはない。気になっていた品が二つ三つあったので、それぞれ手に取って、グリップを確かめ、強度を試したり、張りの強さを試したりした。

「こちらなどいかがです？」店員がへらへらした口調で言う。「お客様。この皮は使い込むほどに良い色になる素材です」
　店員が目をキラキラさせながら言った。満面に笑みをたたえ、ウィンクでもしかねない勢いだ。
　なんだかなあ、と私は思う。「使い込むと良い色になる皮」ってのが嘘くさく感じる。皮財布じゃあるまいし。言われるままに手に取り、ツルを引き、しなり具合を試した。

「お客様、かなり、ご経験がおありで」
　感に堪えないといった風情で店員が言う。少々芝居がかった言い回しだし、どうせ誰にでも同じように言うのだろうが、こっちもそれなりに経験を積んでいるので、そういう風に言われると決して悪い気はしない。でもここは謙遜してみせる所だろう。

「いえいえ。ちょっと嗜む程度で」
「ちょっと嗜む程度でなかなかそうはいきません」
「ふふ。口がお上手で」

「何をおっしゃいますか。お客様、お探しはシコロヌキですか」

　私は向き直って、改めて店員を眺めた。さっきまでシコロヌキを検分していたのと同じようにじっくり店員を見つめた。見つめ直した。店員はそういうことには慣れきっているという風で、平然とこちらを見返している。大したものだ。確かに私はシコロヌキを探している。けれど先ほどはヨロイヒシャギを二つ手に取ったし、店員が来る直前にじっくり見ていたのは投げ道具のアシハライだった。どうしてシコロヌキを欲しがっていると思ったのだろう？

「シコロヌキでしたら奥にもとっておきの品がございます」
　声の調子で、それはかなり特別な品だということは伝わって来た。けれど、なぜ店員がそれほどに便宜を図ろうとしているのか、真意が分かりかねたのでためらっていると、店員は声を落として言った。顔には相変わらずの満面の笑みを浮かべつつ、ただし私にしか聞こえない声で。
「どんなシコロも貫きます。たとえばゲキのトウリョウのあのカブトのシコロでも」

　外鬼の頭領、と確かに店員は言った。他にゲキのトウリョウなんて言葉はない。それからあの兜の錣（しころ）、とも言った。外鬼の頭領がかぶっている兜の首回りを守る頑丈な錣のことだ。それを貫くと言うことが何を意味するかは歴然としている。この男は、近ごろ勢力を伸ばしている外鬼の一派に聞かれたら命を落としかねないようなことを口走っているのだ。けれど、もしも離れた場所から店員の顔だけ見ていたら、相変わらず歯の浮くようなセールストークを吐いているようにしか見えないだろう。

　私もできるだけ感情を表情に出さないようにつとめながら、気のない風に応じた。
「ふうん。じゃあ見せてもらおうかな」
　この瞬間、店員と私は共に極めて危険な状態に入った。もしも外鬼の一味にこの会話を聞かれていたら、私たちはたちまち捕まって頭領の前に引きずり出され命を奪われるか、奴隷にされることだろう。万一、この店員自身が外鬼の一味なら私は店の奥で殺されるかもしれない。けれどそれはないと踏んだ。なぜなら満面の笑みを浮かべる店員が、首から下にびっしょり汗をかいていることに気づいたからだ。店員はものすごく緊張しているし、大きな賭けに出ているのだ。

　それでも店員に案内されながら奥に進む時、私も緊張していた。誰かが襲いかかって来たときのために、すぐにでも父から贈られた短剣を抜けるようにツカに手をかけながら。けれどその心配はなかった。店員が「奥」と呼んだ空間は実際に店の倉庫で、思いがけず広い部屋の周りには棚がつくりつけられ、高価そうな武具が所狭しと並べられていた。どうして私をここに案内したのか尋ねようとしたら店員が先に言った。

「あなたのことは存じ上げていました」
「知っていた？」

「外鬼のところから脱出した唯一の女性だと」
「なぜわかった」
「妹が捕まって」

　店員はそこで口をつぐんだ。言わなくてもわかっている。なぶりものにされて殺されたのだ。外鬼に捕まって死ななかった女は私だけだ。店員は一張りの強力な弓、シコロヌキを手に取ると差し出した。
「本当に使える人にお渡しするつもりで」
　店員が緊張で爆発しそうなのが分かった。私は引き受けるかもしれない。引き受けないかもしれない。引き受けないどころか店員を外鬼に突き出すかもしれない。命がけの大きな賭けなのだ。

　わたしはそのシコロヌキを手に取り、ツルを引き絞りその強度を試した。弓手のグリップ部分にいい皮が使われていた。
「使い込むと良い色になるなら、買おう」
　店員は驚いたような表情で顔を上げ、それから笑顔と涙を同時にほとばしらせながら、はい、はいと何度も頷いた。

（「「使い込むと良い色になる皮」ってのが嘘くさく感じる」ordered by @ymaseminowa-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

●「SFPインデックス」

新作スタート。お題募集中。

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。
「急募！お題」のコメント欄で受け付けています。
どなたでも気軽にご注文ください。初めての人、大歓迎です。

（お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、
　どうか上記コメント欄をご利用ください）

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

※発表済みの作品をご覧になりたい方は
　「SFPインデックス（ただいま作成中）」
　をご活用ください。

とっておきの品[SFP0353]

http://p.booklog.jp/book/44220

著者：hirotakashina
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/44220

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/44220

公開中のSudden Fiction Project作品一覧
http://p.booklog.jp/users/hirotakashina

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.